

その日浮かれていたのは、何の所為だったか。

別に大したことじゃない。ひとコマだけ授業が休講になったとか、ちよつと余計にお腹が空いてると思つたら頼んでない大盛りがたまに間違つてついていたとか、そんなぐらゐの理由だった。

ともかく、その日の私は学校帰りにちよつと良い気分地下鉄に乗つて、銀座の裏通りにある画廊に向かった。割に良い感じの人形展をやつてる、ぐらゐにしか思つてなかつたし、たぶん雨でも降つてたら行くのを止めていただらう。

そんな弱い意志の果てに、今がある。

古びたビル。今にも止まりそうな不安定なエレベータを降りると、薄暗い狭い廊下に出る。その一室が画廊になつていて、毎週代わる代わる色々な作家の人が作品を並べている。

今日の室内はどんな世界になつてゐるやら。

重い深緑のドア。貼られたポスター。花咲く森の少女展。うーん、どうなんだろそのセンス？

扉のノブを引いて、そーと壁の内側へ。見慣れた十畳ほどの展示室。壁際に並べられた机。その上に点々と置かれた磁器人形の娘たち。

一人目。ミニチュアの木に背を預けて微睡む娘。栗色にウェーブした髪。半分閉じた瞼の内側、硝子の瞳はリボンと同じ鮮やかなパステルブルー。その瞳が見つめる先には、彼女自身の小さな足。うん、良い感じだ。

二人目と三人目。

ページュの布を纏つた短い黒髪の少女。もう一人の少女の前で跪いてる。縋るような瞳をして、まるで見てはいけぬものを見たように口を開けて。ただ、差しだされた手のひらに手を重ねる。

柔らかな微笑みで手を差し伸べてゐるのは、長い銀の髪と華美な白いドレスを纏つた少女。その頭の真ん中には、一角の神獣には不釣り合いなほど金属質に輝く銀の角。

その先の全部の少女を覚えてるわけじゃない。

ひとときわ印象的だったのは、花園の中で寄り添つて抱き合う少女二人。

背の高い少女は、お姫様のようなドレスに比べてずいぶん軽そうなショートヘア。背の低い少女はふわふわの髪に上品な乗馬服めいた格好をしている。

背の高い子はもう一人の少女の頬に手を添え、愛おしげに撫でながら唇を欲する目で見つめてる。背の低い子もそれに応えるように腕を回しているけれど、目線の先だけが彼女じゃなくてこちらを向いている。

……それが救いを求めるものならば、まだ分かりやすかつたのだけど。どちらかという、縋っているのは背の高い娘さんのようだった。

人形を一通り見て回つたあとに、一番真ん中の机に目をやる。目を閉じたまま動かない彼女は、きつと人形ではないだらう。そつと近づいてみる。

一番大きい少女は、どの人形よりも滑らかな肌を持つていた。襟にレースのあしらわれた、深い紅色のシックなワンピース。それに合わせた目立たない赤みのかかつた黒い髪。安らかな表情で目を閉じて、革張りの椅子に腰掛ける。